

労務単価引き上げで賃金は改善されているのか ——釧路でも建設労働者の実態調査に着手

川村 雅則

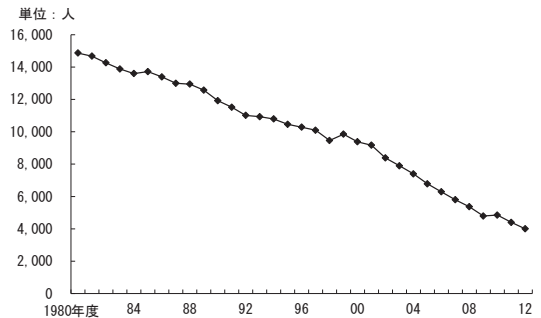
◆はじめに

技能労働者の確保が困難になっているなかで、政府は公共工事設計労務単価を2013年から大きく引き上げた。図表1は北海道の主要12職種の同単価をまとめたものである。ただ問題は、単価引き上げにともない実際に賃金は上がっているのかということである。公契約条例の議論でも、問われているのはこの点である。本誌154号では旭川の建設労働組合（建交労旭川支部）の取り組みが紹介されていた。今号では、同労組釧路¹支部とセンターが共同で今年の4月に取り組んだ、季節労働者を対象とした簡易なアンケート調査結果の一部を紹介する。

◆減少・高齢化する季節労働者とアプローチの難しさ

北海道の季節労働者数は1980年をピークに減少を続けている。ここで示されている季節労働者の数値は短期雇用特例被保険者であるが、現在の数は、ピーク時の4分の1である。釧路管内もそれは同様である（図表2）。2012年度は、4千人にまで減少した。その6割弱（56.8%）を占めるのが建設業の季節労働者である。

図表2 釧路（公共職業安定所）における季節労働者の推移



ところで、季節労働者のこうした実態調査をセンターではこれまでも実施してきたが、失業中の季節労働者を対象に冬期に開催されていた技能講習制度がなくなってからは、彼らへのアプローチは容易なことではない。当時に作成し、何度か整理されてきた名簿（最後に使われたのは2年前）を手がかりに調査を始めた。

高齢化する季節労働者のうち、14年3月時点で65歳以下の者に限定し、調査票を送った。その数は1,006部（人）である。しかし、まず、そのうち43部が宛先不明で戻ってきた。

次に、回収率アップと聞き取りも兼ねて、電話がけをした。人手も足りず、963人全員では

図表1 北海道における主要12職種の公共工事設計労務単価

	特殊 作業員	普通 作業員	軽作業員	とび工	鉄筋工	運転手 (特殊)	運転手 (一般)	型わく工	大工	左官	交通 誘導員A	交通 誘導員B
2014年	16,400 (23,100)	13,500 (19,000)	11,300 (15,900)	17,100 (24,000)	17,400 (24,500)	16,300 (22,900)	13,700 (19,300)	16,800 (23,600)	18,000 (25,300)	18,000 (25,300)	9,900 (13,900)	8,900 (12,500)
2013年	15,400 (21,700)	12,700 (17,900)	10,600 (14,900)	15,700 (22,100)	16,000 (22,500)	15,300 (21,500)	12,800 (18,000)	15,400 (21,700)	16,500 (23,200)	16,500 (23,200)	9,100 (12,800)	8,300 (11,700)
2012年	13,400	11,000	9,200	13,400	13,600	13,300	11,100	13,100	14,000	14,000	7,900	7,100

注：2013年、2014年の下段（括弧内）の金額は、建設労働者の雇用に伴って必要となる、法定福利費の事業主負担額、労務管理費、安全管理費、宿舍費等を、公共工事設計労務単価（上段の数値）に加算した金額。

出所：国土交通省「公共工事設計労務単価」より作成。

なく、電話がけできたのは釧路市内在住者を中心とする588人（不在を含む）である。そのうち、死亡10人、本人転出21人、現役引退あるいは建設以外の仕事に転職83人が確認された。さらに92人は、名簿に記載されていた電話が現在使われていなかった（ケータイ電話への切り替えか）。

◆仕事は増えたが、賃金は上がっていない？

そうしたなかでも、100人から回答を得た（いずれも有効回答）。現役で働いているのがそのうち92人で、さらに、建設産業で働いているのはそのうち81人である。

職種で多いのは「土工・作業員」26人（「土工、オペレーター」の4人を含む）、大工20人である。その他は1桁の人数だ。就業形態は、56人が「季節雇用」である²。

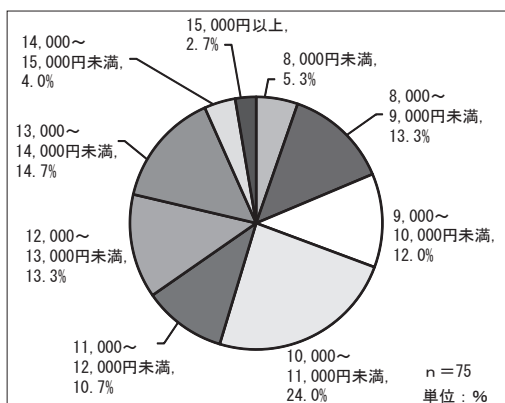
なお集計中であるが（不明は除いて計算）、まず仕事量は、「公共工事が中心」の者でとくに増加もみられる。最多は「変わらなかった」46.8%であるが、「例年より多かった」も34.2%に及ぶ。

だが、賃金は、「変わらない」が86.1%と圧倒的に多く、「上がった」は6.3%にとどまる（「下がった」も7.6%）。

では、その金額を少し詳しくみてみよう。まず、経費分も支払いに含まれる「一人親方・事業主」を含む、75人から回答のあった日額（昨年実績）を1,000円刻みでまとめたのが図表3である。「～11,000円未満」に回答の4分の1が集中している。全体の半数強（54.6%）がこの範囲内におさまる。ちなみに、一人親方等は全員が12,000円以上である。

ところで、釧路市の発注する工事で昨年働いたという回答が27人からあった。職種で多いのは「土工・作業員」10人である。先の図表1によれば、昨年（2013年）の賃金水準は、「普通作業員」で12,700円（「軽作業員」でも10,600円）を支給されることが予定価格の積算上は期待されていた。だがこの金額を超えているのは、2

図表3 調査回答者の日額単価



人だけで、ほかの8人は、平均額で10,138円にとどまった。

公共工事が中心の元請け会社で働く2人からの電話聞き取りも紹介する（いずれも60歳代）。「今年は冬も仕事があったので地方に行かずにすんだ。ただ賃金は日額で数百円上がった程度」「ウチは社保、建退共加入などよその会社より条件はいい。でも賃金は、若いのは日額で200、300円上がったと話しているけれども、自分は変わらない」という（2013年度は、前年比で全ての職種で労務単価は1,000円以上引き上げられている）。

◆労働組合の課題

地方都市では、公契約条例の制定もさることながら、地域経済あるいは地域の建設産業全体を視野に入れた取り組みが欠かせない。現場の把握作業がその前提になる。発注者としての取り組みが釧路市に期待される。同時にそれは、労働組合の課題である。

（かわむら まさのり 北海学園大学准教授）

1 釧路市では、基幹産業の不振や地域経済の急速な悪化で、かつては20万人を超え道内第4位を誇った人口は減少を続け、また、生活保護受給者率が全国でも高水準である。
2 「通年雇用」12人、「一人親方・事業主」8人など、安定層からの回答もみられた。もっとも、雇用保険は「季節で加入」など、仕事の確保という意味での通年との混乱も一部でみられたほか、仕事の安定度については別途検証が必要である。